

令和 2 年 6 月 22 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02934

研究課題名(和文)ポライトネス指導のための日英対照ユーモア研究

研究課題名(英文)A Comparative Study of Humour in Japanese and English Towards Effective Teaching of Politeness

研究代表者

川村 晶彦 (Kawamura, Akihiko)

成城大学・社会イノベーション学部・教授

研究者番号：60407616

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：英語によるコミュニケーション能力の重要な構成要素であるポライトネスは笑いとも密接な関連がある。したがって、コミュニケーションにおける笑いの機能についても正しく理解する必要があるが、日英語・文化における「ユーモア」と'humour'は本来異なるものでありながらも、一方をもう一方の訳語として同一視する傾向も認められ、両者の理解を困難なものとしてきた。本研究課題では、そういった状況も考慮し、文献精査、意識調査、学習辞典も含めた教材での扱いから笑いをいかに外国語教育に取り入れるべきか考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言うまでもなく、言語は文法、語彙、発音だけでコミュニケーションを可能にするものでなく、参与者同士の感情や配慮も必要となる。そして、そのために欠かすことができないものがポライトネスである。英語によるコミュニケーション能力とポライトネスは密接に関連しあっているが、後者の理解には本課題で検討を行った笑いをはじめ言語外の要素に対する深い理解が必要である。その意味で、日本語の「ユーモア」と英語の'humour'との違い等もある程度明らかにし、今後の外国語教育における方向性を示した意義は大きいであろう。

研究成果の概要(英文)：Politeness is a very important part of communication skills in English, and it is closely related with laughter. We thus need to deepen our understanding of various functions it plays in communication, but Japanese 'ユーモア' and English 'humour' have often been considered to be the same through their translations even though they are different. In our project we have considered how laughter should be dealt with in language teaching by referring to existing studies, conducting questionnaires and examining teaching materials including EFL dictionaries.

研究分野：異文化間コミュニケーション

キーワード：ポライトネス ユーモア ジョーク 意味 辞書

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

中学校及び高等学校の学習指導要領で教育目標の1つとして「実践的コミュニケーション能力」の育成が加えられて以来、コミュニケーション能力育成を重視した様々な試みが行われてきた。語用論的な指導内容を外国語教育に取り込もうとする試みも国内外で比較的広く行われてきた(Rose and Kasper, 2001)。しかしながら、語用論的失敗は、特にポライトネスとのかかわりにおいて、コミュニケーションの成否に限らず、人格の否定にすらつながりかねないという重要な指摘もある一方で、教育の現場で十分に指導されてきたとは言えない状況であった(cf. 堀ほか, 2006)。特に、ポライトネス実現と深く関わるユーモアはそれまでないがしろにされてきたといってもよい状態であった。ジョークやユーモアは単なる笑いではない。英語圏では人間関係構築のために日常のコミュニケーションで欠かせないものである。さらに、日本人英語学習者と英語話者の間にはジョークやユーモアに対する態度の違いが存在することも指摘されている(Sakamoto and Sakamoto, 2004)。教育を離れた語用論的事象としてのジョークとユーモアの研究は存在するが(小泉, 1997; 東森, 2011)、教育という文脈において、ポライトネスのストラテジーを検討し、指導する上での目標を具体的に設定することが急務であると考えられた。

研究代表者は、それまで定型表現とその語用論的機能に対して研究を行っており、それまでの研究は、2013年度に開始した科研費のプロジェクト(研究課題番号: 25370729)によって一定の成果を達成できたと自負しているが、次なるステップとして、本研究においてジョークやユーモアに特化した研究を実施すべきであると考えに至った。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、研究代表者の以前の研究課題であるポライトネス指導の研究(研究課題番号: 25370729)を基に、日英語話者間で深刻な語用論的失敗を引き起こす可能性の高いジョークやユーモアについて日英語話者間での認識の相違を明らかにし、実際の教室における指導のみならず教材開発を含めた基本の方針を策定することである。より具体的には、上述の研究課題をはじめ、研究代表者と研究分担者のこれまでの研究と相補完することで、話者の目的に応じて用いるべき表現、さらにその表現をいかなる時にどう用いるか、ジョークによっていかに人間関係を維持、促進するか、といった点まで視野に入れた指導を実現する一助となることを目指している。

### 3. 研究の方法

研究代表者は、上述の通り、ポライトネスに関する表現とその語用論的機能について研究を行ってきたが、研究分担者はそれぞれ英語教育との関連からのユーモア研究、コミュニケーションやユーモア実現の基礎となる意味の研究、ユーモアと深くかかわるメタファーや実際の言語使用を客観的に記述するコーパス言語学の研究に従事してきた。本研究では、各々が持つ専門的知見を基にして、英語教育において重要なポライトネスの観点からジョークやユーモアの振る舞いについて考察し、理論面及び教育面の両面で研究を行った。

より具体的には、上記の目的達成のため、文献精査、学習辞典も含めた英語学習教材の質的、量的分析、インフォーマントに対するアンケート等を組み合わせて総合的に研究を行った。ジョークやユーモアは、言語外の様々な要素をも含んでおり、多角的なアプローチが求められるからである。

### 4. 研究成果

本研究課題は関連分野の文献精査から着手したが、ユーモアやジョークは、参与者同士が共に笑うことによって場を和ませる、といったポライトネスに関わる対人機能だけでなく、ジョークを通じて自己卑下することによって、他者からの「攻撃」を未然に防ぐ防御的対人機能などもあることを確認できた。さらに、いわゆるカタカナ語の「ユーモア」と英語の Humour にはやはり大きな隔たりがあるという点についても再確認できた。言うまでもなく、それぞれを受容する文化レベルでの相違が関わっており、教育という文脈においても注意すべき点である。

また、学習辞書のラベルの分析は順調に進展し、途中経過を国際学会の大会で発表可能な段階までまとめることができた。たとえば、EFL 辞書におけるスピーチラベルの選択と使用、ユーモアに関わるラベルが付与されたエントリーや例文の分析をすることで、ポライトネスと関わるコミュニケーション上の機能、話し手と聞き手の心的態度等、これまで極めて曖昧に規定されていた境界をより明確にできたということは大きな成果と言えるであろう。

上記の分析で用いたデータは Big Five と呼ばれるイギリスの出版社が刊行した上級英語学習者向け英英辞書のうち主要な5冊から抽出したもので、politeness と humorous (相当するラベル含む)は、ほぼ全てで採用されていたが、カバーされている現象は非常に多岐に渡っていることも確認できた。特に「おかしさ」とは直接結びつかない現象も多く認められ、語義や文構造に由来する発話の二義性といったものまでが含まれていることが確認できた。

文献精査で浮かび上がった問題点は、パイロットテストの後、研究代表者の本務校の学生161名を対象にアンケート調査も行った。回答などを詳細に分析した結果として、英語の humor と日本人が一般に「ユーモア」という語から思い浮かべるものとの相違はさらに明確になった。特筆すべき点として、humour の、特に「おかしさ」とは直接結びつかない、むしろ他者への攻撃性を含む特性については、日本人学生が予想以上に拒否反応を示しており、教育という場面の

みならず、今日のグローバル社会におけるコミュニケーションを考える上でも、今一度慎重に見つめ直す必要がある点は明らかである。ユーモアと humour のように、異なる概念であるにもかかわらずしばしば同一視される概念の差異はしばしば見落とされがちであり、深刻な語用論的失敗、ひいては特定の国民や民族に対するステレオタイプを形成する危険性すらあるからである。

文化によって価値観や笑いにおける好み異なるのは容易に想像できることであるが、特にポライトネスとの関連で考えた場合、異なる文化背景を持った相手に自分のユーモアあるいは humour が理解されなかった場合は特に注意が必要である。単に自分のジョークが受けないだけでも十分に不愉快な状況ではあり得るが、緊張している相手をリラックスさせようとジョークを言った場合など、そういった相手に配慮した自分の「善意」も伝わらず、相手の側も、時と場合によっては、ジョークそのものではなく、不適切な状況でジョークを言った人物に対して否定的な評価を下してしまうかもしれないからである。透明性の錯覚といった心理的な現象も関わっており、今後はさらに多角的な視点が必要になることも予想される。

上記の調査結果と研究分担者の教材分析は、2018年11月24日に JALT の全国大会のフォーラムで発表し、翌年11月に当該学会の学会賞である Best of JALT 2018 を受賞することとなった。本研究課題のように、今日のグローバル社会において日増しに重要性が高まりつつあるにもかかわらず、これまで見過ごされてきた問題について関心が高まる一助となることを願っている。一方で、特に、記述を目的とする語用論とその対極である規範を目的とする教育はそもそもアプローチが異なっており、笑い、ポライトネスといった現象を扱う際には注意が必要である。学習者の世界観といった、本来外国語教育が指導の対象とすべきでないものとも厳密に区別する必要があると言える。

本研究課題の研究代表者と3名の研究分担者のうち2名は、本課題の前に別の課題でもポライトネスの指導に関する研究も共同で行っていたため、今後、その成果を可能な限り併せて提供できることも目指したい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 磯野達也	4. 巻 15
2. 論文標題 日本語動詞の語彙的アスペクトと意味表示-「しよる」「しとる」の用法に基づく考察-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会イノベーション研究	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 石井康毅	4. 巻 432
2. 論文標題 語義とジェスチャーの多変量解析に基づく英語前置詞の語義関係分析：overを対象とした試行調査	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 統計数理研究所共同研究リポート	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石井康毅	4. 巻 2
2. 論文標題 認知言語学の知見に基づく英語学習者への前置詞・句動詞の提示：英和辞典と高校英語検定教科書における実践	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 メタファー研究	6. 最初と最後の頁 235-257
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 川村晶彦	4. 巻 14
2. 論文標題 ユーモアとhumourをめぐる 笑い、文化、言語コミュニケーションに関する一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 社会イノベーション研究	6. 最初と最後の頁 119-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 磯野達也	4. 巻 13
2. 論文標題 日本語の動詞と語彙アспект 岡山県津山方言の「しよる」「しとる」の用法調査中間報告	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会イノベーション研究	6. 最初と最後の頁 19-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="http://id.nii.ac.jp/1109/00005010/">http://id.nii.ac.jp/1109/00005010/</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石井康毅	4. 巻 394
2. 論文標題 日本人英語学習者の句動詞の学習・使用状況の分析 検定教科書の技能・領域別データと学習者コーパスの比較に基づく分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 統計数理研究所共同研究リポート	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石井康毅	4. 巻 3
2. 論文標題 話し言葉コーパスと検定教科書に基づく日本人英語学習者の句動詞使用実態の分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Learner Corpus Studies in Asia and the World	6. 最初と最後の頁 101-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石井康毅	4. 巻 381
2. 論文標題 日本人英語学習者が学習・使用する句動詞の分析 網羅的な頻度調査に基づく考察	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 統計数理研究所共同研究リポート	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 磯野達也	4. 巻 172
2. 論文標題 言葉、文法の不思議	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 成城教育	6. 最初と最後の頁 72-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計21件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 8件)

1. 発表者名 Yasutake Ishii
2. 発表標題 A study of Co-textual Figurative Hand Gestures for Better-informed Descriptions of Polysemous English Prepositions
3. 学会等名 The 13th International Conference for Researching and Applying Metaphor (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石井康毅
2. 発表標題 英語学習者向けコロケーション辞典の見出し語分析：日本人英語学習者の視点から
3. 学会等名 外国語教育メディア学会関西支部メソドロロジー研究部会2019年度第3回研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Satoru Uchida, Yasutake Ishii, Yoji Kudo, Christopher G. Haswell, Danny Minn, Seiji Uchida, and Ichiro Akano
2. 発表標題 Constructing a Bilingual Japanese-English Collocations Dictionary: A Corpus-based Approach
3. 学会等名 The 18th Hawaii International Conference on Education (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yasutake Ishii
2. 発表標題 Development of the CEFR-J Grammar Profile: For Automatic Identification and Counting of the Uses of Grammatical Items
3. 学会等名 The UK-Japan Symposium "New Methods and Data in Second Language Learning Research , Meeting 2" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石井康毅
2. 発表標題 研究成果を正しく伝えるためのコーパスの活用 (講演講師)
3. 学会等名 学術英語学会第5回研究大会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yasutake Ishii
2. 発表標題 Assessment of Japanese EFL Learners' Grammatical Proficiency Levels Based on the CEFR-J Grammar Profile
3. 学会等名 The UK-Japan Symposium "New Methods and Data in Second Language Learning Research , Meeting 1" (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akihiko Kawamura, Kimiko Koseki and Scott Gardner
2. 発表標題 Should L2 pragmatic usage of jokes be taught?
3. 学会等名 44th Annual International Conference on Language Teaching and Learning & Educational Materials Exhibition (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yasutake Ishii
2. 発表標題 More Objective Descriptions of Semantics of English Prepositions Based on the Observations of Accompanying Gestures
3. 学会等名 Metaphor Festival 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yasutake Ishii
2. 発表標題 Observing Co-textual Figurative Gestures for Better Informed Descriptions of Polysemous English Prepositions
3. 学会等名 外国語教育メディア学会関西支部メソドロジー研究部会2018年度第3回研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Scott Gardner
2. 発表標題 Tour Guide or Muse? Advancing Student Humor and Creativity in Language Learning
3. 学会等名 Australian Humour Studies Network (AHSN) 2018 Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Scott Gardner
2. 発表標題 Promoting Student Creativity in Language Learning (Mainly with Humor)
3. 学会等名 Okayama JALT April meeting
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 磯野達也
2. 発表標題 日本語の動詞と語彙アспект
3. 学会等名 レキシコン研究会（於 慶應義塾大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石井康毅
2. 発表標題 日本人英語学習者の句動詞の学習・使用状況の分析 検定教科書の技能・領域別データと学習者コーパスの比較に基づく分析
3. 学会等名 統計数理研究所言語系共同研究 言語研究と統計2018
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石井康毅
2. 発表標題 CEFR-J Grammar Profileの活用（ワークショップ講師）
3. 学会等名 2017年度CEFR-J公開シンポジウム：CEFR-J 2018
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石井康毅，投野由紀夫
2. 発表標題 CEFR-J Grammar Profile
3. 学会等名 2017年度CEFR-J公開シンポジウム：CEFR-J 2018
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石井康毅
2. 発表標題 コーパス中の英文法項目の特定と頻度集計：CEFR-J Grammar Profileの取り組み
3. 学会等名 日本ドイツ語情報処理学会2017年度研究発表会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yasutake Ishii
2. 発表標題 Describing Figurative Semantic Networks of English Prepositions in a Bilingual Dictionary
3. 学会等名 Metaphor Festival 2017（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石井康毅
2. 発表標題 日本人英語学習者が使用する句動詞の分析 学習者の話し言葉コーパスと中高の検定教科書に基づく考察
3. 学会等名 第3回アジア圏学習者コーパス国際シンポジウム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石井康毅
2. 発表標題 認知言語学的視点に基づく英語学習者への句動詞の提示 高校英語検定教科書における実践
3. 学会等名 日本語用論学会メタファー研究会 夏の陣2017「比喩と隠喩」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 石井康毅
2. 発表標題 日本人英語学習者が学習・使用する句動詞の抽出と分析
3. 学会等名 統計数理研究所言語系共同研究 言語研究と統計2017
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yasutake Ishii
2. 発表標題 The Development of the CEFR-J Grammar Profile
3. 学会等名 大学英語教育学会第55回国際大会 シンポジウム “The Development of the Grammar/Text/Error Profiles for the CEFR-J”
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 Rucynski, J., & Prichard, C. (Eds.)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Lexington	5. 総ページ数 308
3. 書名 Bridging the humor barrier: Humor competency training in English language teaching	

1. 著者名 投野由紀夫・根岸雅史（編著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大修館書店	5. 総ページ数 253
3. 書名 教材・テスト作成のためのCEFR-Jリソースブック	

1. 著者名 投野由紀夫（編）；投野由紀夫・石井康毅・三省堂編修所執筆	4. 発行年 2020年
2. 出版社 三省堂	5. 総ページ数 1803
3. 書名 エースクラウン英和辞典 第3版	

1. 著者名 市川泰男，高橋和久，石井康毅，他8名（編著）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 文英堂	5. 総ページ数 160
3. 書名 UNICORN English Communication 3 NEW EDITION	

1. 著者名 Akihiko Kawamura	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Hituzi Shobo	5. 総ページ数 316
3. 書名 Lexical Pragmatics: Teaching English Communication and Pragmatic Skills to Japanese Learners (Hituzi Linguistics in English No.28)	

1. 著者名 市川泰男，高橋和久，石井康毅，棚橋昌代，桃尾美佳，John R. Hestand，株式会社文英堂編集部	4. 発行年 2018年
2. 出版社 文英堂	5. 総ページ数 207
3. 書名 UNICORN English Communication 2 NEW EDITION	

1. 著者名 市川泰男, 高橋和久, 石井康毅, 棚橋昌代, 桃尾美佳, John R. Hestand, 株式会社文英堂編集部	4. 発行年 2017年
2. 出版社 文英堂	5. 総ページ数 184
3. 書名 UNICORN English Communication 1 NEW EDITION	

1. 著者名 高見健一, 行田勇, 大野英樹, 磯野達也ほか全50名	4. 発行年 2017年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 264 (担当箇所5ページ)
3. 書名 不思議 に満ちたことばの世界 下	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	Gardner Scott  (Gardner Scott)  (30304330)	岡山大学・教育学研究科・教授    (15301)	
研究分担者	磯野 達也  (Isono Tatsuya)  (10368673)	成城大学・社会イノベーション学部・教授    (32630)	
研究分担者	石井 康毅  (Ishii Yasutake)  (70530103)	成城大学・社会イノベーション学部・教授    (32630)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	クック メロディー  (COOK Melodie)	新潟県立大学・国際地域学部・教授	
研究協力者	カウイー ニール  (COWIE Neil)	岡山大学・言語教育センター・教授	
研究協力者	フジシマ ナオミ  (FUJISHIMA Naomi)	岡山大学・言語教育センター・教授	
研究協力者	ハリソン ティリー  (HARRISON Tilly)	英国ウォリック大学・応用言語学研究所・准教授	
研究協力者	リチェズ デニス  (RICHEs Dennis)	成城大学・社会イノベーション学部・教授	
研究協力者	スペンサー＝オーティアー ヘレン  (SPENCER-OATEY Helen)	英国ウォリック大学・応用言語学研究所・教授	